

燈火法語

うれしさを

二倍にできる

半分こ

(ある掲示板の言葉)

●今回はある掲示板で出会った

「うれしさを 二倍にできる 半分こ」

という言葉。読み上げてみると、小さな子ども達が、お菓子でも「半分こ」にしたのでしょいか、互いに笑顔になる、カワイイやり取りが目に見えます。

子育てをしていると、「半分こ」にしてあげればいいのに、逆に「独り占め」をして、些細なことでケンカになる子ども達の姿があります。お菓子やオモチャ、お母さんの隣など、取り合いのケンカが始まるのです。そんなときどうしても怒られてしまうのは、お姉ちゃん。逆に末っ子にはどうしても甘くなってしまうですね。これらの中には「半分こ」にできないものもありますが、親として子どもたちには「人にどうぞと与える」ことのできる人に育ってほしいと思っています。ですので、一つの物を

取り合ってケンカをする子ども達には、

「分けてあげたら？ 貸してあげようよ！」

と声をかけますが、握りしめた手をなかなか離してくれません。その先には、弱きものや、叱られたものの泣き声が響くのです。

これらは、我が家の子ども達の一コマですが、大人になった自身を振り返ってみると、どうでしょう？ 自分にとって大切なものを「半分こ」にして、いつも「うれしさ」を他人と分かち合うことができているでしょうか？ 本当に大切なものに関しては、他に取られまいと握りしめている姿があるのではないでしょうか。そんな生まれ持ったの性分を持った、私たちだからこそ「うれしさを 二倍にできる 半分こ」と、分け与える喜びが広がっていく、この心を大切にしたいものです。

●「半分こ」から連想される仏教の言葉と

して、『布施（ダーナ）』があります。布施といえば、お寺に包むお金というイメージがありますが、もともと仏教ではもっと広く、深い意味があります。

「布施」とは、他に与えることで、私の持つ金品だけでなく知識、行動を見返りを求めることなく、周りの方々のしあわせや

安らぎの為に分け与えることを言うので

す。例えば、財産が無くとも、他に施すことのできる行いとして「無財の七施（しちせ）」があります。すべてを紹介する暇はありませんが、いくつかをあげると、

●和顔施（わげんせ）和やかな、微笑みのある顔で人に接すること。

●言辞施（ごんじせ）思いやりのこもった、あたたかいことばを人にかけること。

●身施（しんせ）自分の身体をもって人のために奉仕を行なうこと。

これらの行いを受ける立場となると「うれしさ」はより大きくなり、逆に「悲しみ」は和らいでいくことでしょう。でも、いざ実践するとになると、「言うは易く、行うは難し」です。自分の「しあわせ」ばかり考え、他に奪われまいと生きる私の愚かな姿がみえてきます。

でも、ご安心下さい。そんな私の性分を知って下さり、安らぎをどうぞとばかりたらいで下さっている仏さまがいらっしゃる。念仏を申すなかに、今も仏に願ひ掛けられ、大切に思われてあった「私」であったと、安心していける世界もあるのです



おはなまつり

●今年で十四回目になる『おはなまつり』

が保育園と照明寺で開催されました。天候にも恵まれ、たくさんの方々にお参りをいただきました。はじめた頃は小さなイベントでしたが、年を重ねるごとに来場者も増えてきて、今回の飲食や物品、ワークショップのお店は約五〇店舗にもなりました。

イベント名にもある「オハナ」はハワイの言葉で「家族」という意味があり、お釈迦さまの誕生を祝う「花まつり」と掛けて「おはなまつり」という名前にしました。

お釈迦さまの誕生を皆で祝い、仏さまのあたたかな心に触れて、「私の家族」といえるような人の繋がりが広がってほしいなという思いが込められています。

昔に考えた、このコンセプトは時を重ねて実を結び「家族」といえるような、人の輪が着実に広がっているように思います。

おはなまつりが始まった十四年前を振り

返してみると、イベント運営の経験もなく、少ないスタッフで、「何を準備したらいいか?」「どうすれば人が来てくれるのか?」分からないことだらけで、手探りの状況で始まりました。

でも今では有り難いことに、当時からずっとスタッフとして動いて下さっている方もいますし、快く手伝ってくれる方も増えてきました。半年以上前から仕事終わりの夜に、何度も打ち合わせを重ね、企画から前日の準備、終わった後の撤収まで、陰で尽力してくれた方もいます。無事に「おはなまつり」を終えて思うのは、苦楽を共にする「家族」のようなスタッフの存在に感謝の気持ちでいっぱいになります。

●今年の「おはなまつり」の初の試みの一つとして、「泥団子作りコーナー」を作りました。日常の保育園では、園児が泥団子を作って遊ぶ、「良い土」がある所に、バケツやザルなどの道具などを用意してもらい、あとは「ご自由にどうぞ」という感じでしたが、大人気の間所となりました。

その泥団子作りでの私の記憶に残るほほえましい家族の風景が一つあります。あるお父さんと子どもが泥だらけになって、時間をかけて、丁寧に泥団子を作っていました。おそらく、このお父さんも子供の頃に自分の手で泥団子を作った経験あったのでしょう。子どもに、「こうするんだよー、ああするんだよー」と、楽しそうに会話をしつつ、一生懸命になっていました。

後になって、その子のお母さんとお話すると『日頃はゲームやユーチューブなど画面ばかり見ていて、外で遊ぶことすらない息子がこんなに集中して泥団子を作っていることが、とても嬉しい。もっと土に触れたり、自然の中で過ごしたりする経験をさせてやりたいんですけどね。泥団子作りが楽しくて、お父さんも息子も声をそろえて、「まだ帰らない」って言うんですよ。』と笑いながら話してくださいました。

たくさんの方の笑顔に溢れた「おはなまつり」また来年も開催します。皆さん、ありがとうございました。